

豊太郎の留学以前の人生について

私がこのテーマを選んだ理由は、豊太郎は留学以前にはものごとをどのように考え行動してきたのか、どんな考えがその根底にあるのかということを自分なりに考察してみたいと思ったからである。

私がこのレポートにおいてもっとも主張したいことは、「豊太郎の留学以前の人生は母のために生きた人生であった」ということである。

私はこの主張について、本文中における豊太郎の母に対する考え、愛情、そして母から豊太郎について考えていきたいと思う。

まずはじめに、おおまかなおいたちについて書きたい。

豊太郎は厳格な家庭に育ち、早くに父親を亡くしてしまった。だが、「父をば早く失いつれど、学問は荒み衰ろうことなく」とあるように、父が亡くなったことに対する、学問への影響が少なかったことが伺える。おそらくこれは父からの遺言を忠実に守った、と考えられる。

その遺言を守ったうえで、母の言うことに従い、また官長や周りの人間の言うことを丁寧きちんと聞いて学問に励み、仕事に打ち込み、どこかはわからないが「省」につとめ、ついには念願かなってドイツへの留学を果たすというのが豊太郎のおおまかな生い立ちである。

ではなぜそんな豊太郎の人生が母親のためのものであった。と私が考えるのか、その理由を書いていきたい。

父を早くに亡くした一人っ子豊太郎にとって、母親という存在がその以後からは大変大きなものになったことが考えられる。これは、豊太郎が19のときに「省」に出仕した際に、故郷の母をわざわざ都まで呼び、そこで楽しく暮らしたということからも読み取れる。

また、豊太郎が母親のことを深く思っていたことの根拠には次のようなものがある、

一番確実なものには、母親死んだことを聞いた場面のところである。本文中でも、「わが生涯にて最も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。」や「我がまたとなく慕う母の死」ともあるように母親への愛情が格別であることは十二分に読み取れる。

また、本文中の父の死に関する記述を比べてみてもその差は明らかで、母への感情がより強かったといえる。

次に、豊太郎が横浜の港を出る際には、母と別れるのはさほど悲しくないようなことを書いていたが、実際に港を出るときには涙を流していた。ということや、「余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きる辞書となさむとし、我が官長は余を生きる法律となさむとやしけむ。辞書たらむはなほ堪ふべけれど、法律たらむは忍ぶべからず。」という文章から考えると、豊太郎の考えが変わったあとでも、「官長の言うことは聞けないが、母の言うことならば耐えられる。」という意志だととれる。

さらには、母の死後急速にエリスとの交際が深いものへと変わっている。母の死により

愛情がエリスに移ったのであろう。

そして、豊太郎は後に自分の過去の人格について、「わが心はかの合歡といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。わが心は処女に似たり。余が幼きころより長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道を歩みしも、みな勇気ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬほどの勇気ありしにあらず、ただ外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。」という文においては否定をしているが、過去の時点においては、「余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるがうれしさに怠らず学びし時より、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし」とあるように、人からほめられる、特に母からほめられることが豊太郎の生きがいであった。豊太郎が誰よりも愛していた母親からほめられたい、期待にこたえたい、という気持ちがあったのだろう。母親の視点から見ても、豊太郎は大事な一人息子で夫が死んでから手に塩をかけて育ててきたであろう存在である。また豊太郎も、「旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備黌に通ひし時も、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。」とあるようにそれを自覚している。

また、これに関する記述は見当たらないのだが、夫をなくした母にとって収入は非常に乏しかったことが推測される。にもかかわらず、豊太郎を大学にまでやった母親の努力は並大抵ではないと思う。そしてその思いに応えるという意志が豊太郎にはあった。

このような関係がなりたった中での豊太郎の考えというのは、父の遺言を守り、母を喜ばせる、母の期待にこたえる、ということが豊太郎の中で大きなものだったのではないだろうか。豊太郎が家の名誉、そして功名の念を持ったのは、母親の教えに従ったからだろう。またこのときが明治時代だったということにも注目をしてほしい。尊皇攘夷の風習とともに、なにかに忠義をもって使え、「なにか信じるもの、誰かのために生きる。」という概念が念頭にあったこの時代で、豊太郎の場合は、たった一人残った肉親の母親がそれに当たったのだ。

以上から、豊太郎の留学以前の人生はまさに母親のために尽くした人生だったといえる。それこそが、豊太郎が留学前に望んでいたこと、生きる価値だったのである。

いまだに残る疑問点は、私はこのレポートにおいて一貫して「母親のため」という豊太郎の考えを提言してきたが、なぜドイツへ行く際に母親を連れて行かなかったのか、というところである。留学に親を連れて行かないのは普通だといわれそうだが、上京の際にわざわざ母を呼んだことを考えれば特に矛盾はない、そして留学といっても仕事なのでどれくらいで帰ってくるのかがわからないので、連れて行きそうなものである。省に勤めていたことも考えると、金銭的な問題とも考えにくい。